運動と勉強が児童・生徒に与える意味に関する研究
テレビドラマの分析から

○野村徹（東京学芸大学大学院）

キーワード：運動能力・社会意識・テレビドラマ

１．問題の所在と目的

運動や体育への意識を男女で比較したものとして、山崎らが小学校３～６年生を対象に質問紙調査を行っている。そこでは男子の方が女子に比べ運動を好きであることや、運動が得意になりたいと思っていることを明らかにしている(山崎ら，2003)。また渡邊らは中学２～３年生を対象に同様の調査をしており、男子の方が女子に比べ体育授業を好きである者が多いことを明らかにしている(渡邊・中嶌，2006)。どちらの研究においても、女子よりも男子の方が運動や体育を好意的に捉えていることが明らかになっている。

松田は、ミシェル・フーコーの議論を体育に援用し、運動、動作、姿勢、速さといった尺度から身体を「能力」として捉え、その能力を高めるという規準から統制することで、潜在的に危険な力を持つ身体を服従関係に取り込んでしまう、つまり、高い能力を持った理想的な身体モデルというものが、学校文化として作られてきたという指摘をしている(松田，2001)。高い能力を持った身体が理想的とされてしまうのであれば、もともと「男らしさ」を競うための文化であり、主に筋力によって勝敗が決定するものが多いスポーツを主に扱う体育において、その得手・不得手は女子よりも男子にとってより大きな関心事となることは容易に理解できる。

運動・体育への関心度が男女で異なることから、その捉えられ方は男女で異なることが予想される。しかしその高い能力を持った児童・生徒が、他の児童・生徒や教師からどのような存在として捉えられているのかについては明らかにされていない。そこで本研究では、運動の得意な男女がどのような存在として捉えられているかを明らかにすることを通して、運動能力に潜む社会意識を明らかにすることを目的としている。

２．分析の枠組みと対象

社会意識を明らかにするうえで、広田は、メディアに描かれる子どもに対し、「社会における子どもイメージ」を描いたものであると言う(広田，1998)。このことは、子どもに対する社会意識と言い換えることができる。その中でも、フィクションであるテレビドラマは、現実を忠実に描いているとは言えないものの、そこからは人々の、子どもへのまなざしが読みとれる。そこで本研究ではテレビドラマを分析することとした。

対象とするドラマに関しては、選択規準を設けることで重要な論点を多く引き出せるケースを選別する「目的的サンプリング」というサンプリング(S.B.Merriam, 1998)により、選別した。規準は、①学園を舞台としたもの、②スポーツや勉強が主要テーマになっていない、③ある程度の視聴率を得ているもの、の３つとした。

これらの規準より、本研究では、「３年Ｂ組金八先生７」(2004年～2005年，ＴＢＳ)及び、「女王の教室」(2006年，日本テレビ)の分析をした。

具体的な分析にあたり、能力を高めるということに関しては、体育に限らず他の教科においても、高い能力を持った者が理想的とされることになる。言い換えれば、体育以外のいわゆる「勉強」においても、その得手・不得手は児童・生徒にとって大きな関心事になるはずである。そこで本研究では、運動の得意な男女がどのように描かれるのかということと、勉強の得意な男女がどのように描かれるのかを比較することを通して、運動能力に潜む社会意識を解釈的に明らかにする。

３．結果(一部)

「３年Ｂ組金八先生７」からは、以下のような結果が得られた。

・クラスで最も勉強に励む生徒として描かれるのは男子生徒。いわゆる「ガリ勉」として描かれる。

・クラスで最も運動に励み、得意とする生徒として描かれるのも男子生徒。

・クラスのリーダーとして描かれる生徒は、運動は得意だが勉強には興味のない男子生徒。

・勉強に励み「ガリ勉」として描かれる男子生徒は、正論を言ってもクラスメイトや担任からとりあってもらえない。

尚、当日は、以上のような結果に「女王の教室」から得られた結果を加え、発表する。